児童健全育成賞（數納賞）佳作

児童館における SDGs の実践
－計画の策定から実践まで、SDGs 未来都市日野市の児童館－

東京都日野市
さかえまち児童館　館長（副主幹）　佐々木　哲

1．はじめに

SDGs（エス・ディー・ジーズ：持続可能な開発目標）とは、2015 年 9 月の国連サミットで全加盟国の採択を受けた国際目標のことである。「持続可能な開発目標」を意味する「Sustainable Development Goals」の略称であり、次世代に引き継ぐための将来像を 17 の目標で表している。

「誰一人取り残さない」と言う SDGs の理念は、2022 年の現在においては多くの人が周知のものとなっており、SDGs の展開も様々な地域で実践されている。

日野市の児童館において SDGs に関連づけた事業を行うにあたっては、単に事業に SDGs を結びつけて実施した訳ではない。計画を立て、職員への研修を行い、地域の関係団体を探し、連携して実践したのである。

2018 年より児童館の 5 か年計画（2020 年 4 月から 2026 年 3 月まで）の策定を始め、SDGs を載せる過程までが 1 つの大きな作業であった。

加えて、2 つ目として、5 か年計画を始動し、SDGs に関連した団体を探して連携、児童館事業と SDGs を関連付けた事業を展開したものである。実践報告として、これら 2 つの作業を合わせて論じていきたい。

2．日野市の SDGs と児童館の SDGs

（1）SDGs 未来都市日野市

内閣府は、地方自治体の SDGs 達成に向けての優れた取組を提案した都市を「SDGs 未来都市」として選定している。日野市は「市民・企業・行政の対話を通した生活・環境課題産業化で実現する生活価値（ＱＯＬ）共創都市 日野」として「SDGs 未来都市計画」を策定した。

2019 年 7 月 1 日、日野市は宇都宮市やさいたま市などと共に「SDGs 未来都市」に選定された。東京都内では初の選定となった市である。2020 年に豊島区、2021 年に墨田区、江戸川区、2022 年は足立区と板橋区が選定されており現在、都内で「SDGs 未来都市」は 6 自治体である。

（2）なぜ児童館で SDGs なのか

2019 年に日野市が SDGs 未来都市に選定されたのを機に児童館でも SDGs を展開しようと考えた。子どもに関わる仕事をして、常に考えていることは、子ども達にどうやって明るい未来を残してあげるかということである。特に人間の活動により地球温暖化が進んでいる状況を危惧している。また、差別なく平和でいることの難しさも痛感していた。

SDGs は「より良い未来をつくろう」と国連で決めた 17 の目標である。私はこの目標を見た際に「心配し何とかしたい事が全部出ている」そして「ほとんど児童館で目指してやっていることではないか」と感じたのである。SDGs に

掲げられた目標は「人類（子どもたち）の未来・環境を守る、差別ない平和な未来を自分たちでつくること」である。これは今までも児童館で目指し実践しており、今後もやっていく内容である。つまり児童の健全育成を担う児童館でSDGs をやらない理由はないのである。国を超え未来を想う全世界の企業、ＮＰＯ、教育者、専門家、クリエーターなどがSDGs を進めており、子育て支援・子育ち支援をする児童館も当然、共有する目標として進めて然るべきだと考えたのだ。

３．計画の策定にあたって（計画の重要性）

SDGs を児童館で展開する上で単に思いつきで進めるのではなく、計画して進める必要を感じていた。何故なら計画したものを実践し、成果を挙げるというプロセスを踏む事が自治体の仕事の基本だからである。

ただ、計画を策定する大切さを実感したのは、恥ずかしながら、現場を離れて、事務方として児童館を管轄する主管課（日野市子育て課）に配置をされ、役所勤務を経験したことで得たものである。

現場にいると自館だけで簡単な計画を立てて実施、反省で終わってしまうことが多々ある。自治体の業務は法律に基づき実施する。実施においては計画作成し、計画に従って遂行される。ゆえに、計画の中に入っていない事業では発展があり得ないし、成果を出しても認められない。そこで、計画に SDGs を入れて進めなければならないと考えた。

さらに、PDCA サイクルで、計画作成、実施し、結果の検証、調整し継続と一連の流れを組むことも考えた。特に成果を『数字で表す』など「見える化」し定期的に報告する事の重要性を忘れがちなので重点として考えた。常に「見える化」し報告を行わないと、せっかく実施した良い結果も認められないし、場合によっては予算削減、事業自体の継続も危機的状況になる可能性があるからだ。

４．計画の策定開始

今回、SDGs を児童館事業に関連付けて実施するにあたり、児童館の５か年計画案に SDGs の実施を加えようと考えた。

折しも日野市の児童館の計画を見直す時期もちょうど重なっていたのである。日野市がSDGs 未来都市に選定される１年前、2018 年７月から児童館では新しい計画の策定を開始していた。

日野市の児童館は、平成 19 年（2007 年）に、子どもと子どもを取り巻く環境の充実に向けて児童館の整備、事業展開、職員配置及び運営形態などを定める『日野市の新しい児童館構想』を策定した。その時から 10 年以上が経過し、時代に合わない内容や新たな課題が見えてきた。加えて 2018 年には、厚生労働省から『児童館ガイドラインの改正』が行われたこともあり、『児童館ガイドライン』を網羅した内容に変更し、計画を策定することが必須となっていた。

５．今後の児童館あり方検討会ワーキンググループ

（１）ワーキンググループの立ち上げ

2018 年７月、計画の作成にワーキンググループ（以下「W．G.」）を立ち上げた。W．G. は児童館の代表館長、児童館の専門職員（各館１名）、主管課職員（課長補佐と副主幹２名）で構成した。児童館だけでなく主管課の職員が加わることで、上位計画や他部署の計画との整合を図り、連携することが容易にできるようになった。

（２）学習会の実施

W．G. を発足させて、最初に行なったことは、市の財政状況、市内の他部署の計画等について学ぶことだった。事務局として参加した課長補佐のアイディアで、現場にいると日々の業務に追われて、市内での自分たちの立ち位置が分からなくなってしまう。他の事業と整合の取れない計画では全く意味をなさない。先ず市の状況として他部署の計画を学ぶことが大切だと

考え、その上で自分たちの計画を策定する事にした。

W．G．で開催する学習会は、W．G．以外の児童館職員も参加を呼びかけ、月１回のペースで実施した。内容は、１番に市の財政について学んだ。財政課の職員に講師を務めてもらい、市の財政の現状や予算の組立等を学んだ。次に平成 30 年 10 月に改正された厚生労働省の『児童館ガイドライン』である。都内で開催された説明会に出席した職員が講師となり市内の児童館全職員向けにガイドラインの学習会を行った。

さらに、児童館に直結する上位計画である、子ども・子育て支援法第 61 条に基づき市が策定する「子ども･子育て支援事業計画」である。日野市では『新！ひのっこすくすくプラン』である。主管課も次期同計画を策定中で、事務局として参加していた課長補佐と私が講師となった。

他にも関係する計画を分担して調べ、職員同士で互いに講師となり学んだ。「第五次日野市行財政改革大綱実施計画」「日野市公共施設等総合管理計画」「日野市子どもの貧困対策に関わる基本方針」などである。

（３）中間報告及び計画の完成

学習会と並行して W．G．では、①旧計画である「日野市の新しい児童館構想（2007 年～）」の検証を実施。②「児童館の役割と目的」として、児童館のあるべき姿を模索。③「今後の展開」具体的な計画案の作成を行った。③「今後の展開」では、児童館ガイドラインで示された「拠点性」「多機能性」「地域性」を軸に、日野市独自の持続可能な施策を加えた 11 項目に、SDGs を加えて計画を策定した。

2019 年 11 月、理事者へ中間報告として副市長を招きプレゼンテーションを実施した。副市長からの指摘を受け、計画の調整を行い、令和２年３月、『「日野市の児童館今後の展開」～いつだって子どもの味方！みんながつながる児童館～（令和２年度～令和６年度）』が出来上がった。計画策定が不慣れなこともあり１年９か月を費やしての完成となった。

６．児童館における SDGs

（１）児童館における SDGs の考え方

冒頭で SDGs は今までも児童館で実施しており、今後もやっていく内容であり、健全育成を行う児童館でやらない理由はない、と述べた。児童館での SDGs の捉え方としては、子どもが分かるように、難しく考ず、先ずは「知ること」そして「自分の事」として捉えて、簡単な事で良いので「自分にできることを実践する」ことを大切とした。

多くの企業や自治体で計画実施している SDGs は大掛かりな規模であり、職員数の少ない児童館ではとても真似はできない。児童館で考えるのは、子ども達を含めた自分たちにできる SDGs である。

SDGs の 17 の目標を見ていくと「No １貧困をなくす」「No ２飢餓をゼロに」「No ３すべての人に健康と福祉を」「No ５ジェンダー平等を実現しよう」…「No17 パートナーシップで目標を達成しよう」と、ほとんど児童館がやっている、やってきた、そして、これからやろうとしている内容である。

ただ、一見すると児童館と関連が薄いように見えるものある。例えば「No ８働きがいも経済成長も」、「No ９産業と技術革新の基盤をつくろう」等である。これらについても、子どもの目線で考えるなら「世の中にはどんな仕事があるか考えてみよう」「新しい技術がどんなエコになっているか知ろう」「SDGs 謳っている会社を応援しよう」などとできる。

また、内閣府の『少子化社会対策大綱（2020 年策定）』には「人口（特に生産年齢人口）の減少と高齢化を通じて、社会経済に多大な影響」と記載がある。日本経済団体連合会においても『「豊かで活力のある日本」の再生（2015 年）』に少子化対策が日本経済の未来を支えるとしている。

つまり少子化を含む子どもの問題＝経済問題と考えると SDGs8 番９番も、子どもの健全

育成と密接に関わっていると言える。SDGs の 17 の目標は、ほとんどが児童館で進める目標と合致しているのである。

（2）児童館で SDGs を進める準備（担当課との確認）

2021 年 5 月。「日野市 SDGs 未来都市計画」を策定し推進する企画経営課の担当者と児童館の SDGs の展開について相談をした。企画経営課の計画は官民の諸力融合などが中心となっており、児童館の目指す SDGs と合致する点は少なかった。ただ、SDGs を自分の事と捉えて児童館で実践すること、特に「子どもや市民向けの SDGs の啓発等」を行うことの大切さは企画経営課にも歓迎され、共通認識が図れた。

7．職員に向けた SDGs の啓発

（1）職員への啓発（職員向け研修資料作成）

児童館の 5 カ年計画において SDGs を掲げたが、当初は SDGs の概念を知っている職員は少なかった。そこで、先ず職員に向けて SDGs の啓発をすべく、職員向け SDGs 研修教材の作成に当たった。

日野市は 10 館ある児童館を「基幹型児童館」と「地域型児童館」の機能別に分ける独自体制がある。基幹型児童館の機能は、通常の地域型児童館の機能に加えて、先駆的な事業を行うことが目的の 1 つにある。そこで基幹型児童館において、先駆的な事業として「SDGs 研修用パワーポイント」を作成した。研修教材の元にしたのは、企画経営課が提供してくれた子ども向けの SDGs 啓発教材であり、児童館と学童クラブ職員向けにアレンジして作成した。

出来上がった教材を使い、全児童館職員を対象とした研修を実施した。私と主任職員が講師となり、全館を分担して出向き、児童館職員向けに 30 分程度の研修を実施した。児童館職員には研修後、管轄するブロック内の学童施設へ行ってもらい、今度は自身が講師となり、学童クラブ職員へ研修を実施する旨を伝えておいた。講師になることで理解が深まり、効率的に全職員に展開できると考えたのだ。

（2）職員向け SDGs 研修の実践

職員を対象とした SDGs 研修は期限を設け、2021 年度内に完了する目標を立てた。研修終了後は実施日と実施した児童館職員名を記載して責任を明確にし、実績として事業報告書に掲載することにした。

2021 年 7 月から児童館職員への研修を始め、同年 11 月までに市内 10 館、約 50 名が研修を受講した。研修を受けた児童館職員が分担して、学童クラブ 28 施設の職員約１５０名の SDGs 研修も無事終了した。

年度内に児童館と学童クラブの全職員約 200 名が、研修を受ける事ができたのだ。

（3）SDGs の実践報告「見える化」について

SDGs の実践は、毎年、通常業務の実績を掲載する『事業報告書』に記載して「見える化」を図った。児童館は地域に必要な仕事をしていると言うだけよりも、記録し「見える化」する事が重要だからだ。

8．児童館内での実践

職員研修後、子どもや保護者に向けた SDGs の啓発等を実践した。

（1）シェイド（日よけ）の作成。

さかえまち児童館東側の窓の外に、2 メートル四方のシェイドに「SDGs 未来都市ひのし」の文字をフエルトで貼付け、屋上から下ろした。道路から見えるようにし市民に SDGs のＰＲを実施した。

（2）館内に SDGs の説明と具体例を描いたポスターの掲示。

「見ないテレビは消す」「いらなくなったらリサイクルを考える」など SDGs の実践例が書かれたポスターに、子どもたちに絵を書いてもらい、廊下やトイレなどに SDGs の啓発として張り出した。

（3）Twitter に SDGs の＃ハッシュタグを付ける。

児童館で日々更新するツイッターを書く際、内容が SDGs の何番に当たるかを記載した。幼児の活動であれば「＃ NO3 すべて人に健康

と福祉を」、廃材を使った木工作を行う場合は「＃NO１５陸の豊かさを守ろう」などハッシュタグを付けるようにした。

（4）クイズで広げる SDGs 啓発

館内に「あなたが知っている SDGs を教えて」と張り出し、紙とペンを備えた。「レジ袋をもらわない」など子どもたちは気軽に書いてくれた。それらをまた掲示し SDGs の啓発につなげた。

9．保護者と連携した SDGs

児童館内だけでなく、保護者と連携した SDGs 事業について。児童館では「おさがりバザール」「おさがりフェス」など銘を打って、サイズアウト（子どもが成長し着れなくなった）した服を集め、希望する家庭に無償で配布する「リサイクルの事業」を実施している。2014 年から開始して今年で 9 年目となる。現在は SDGs「No12 つくる責任、つかう責任」と銘を打って実施している。

児童館を利用する保護者が「まだ着られるのに捨てるのはもったいない、何とか必要な人に渡せないか」と考えて始めた事業である。使わない子供服の提供を呼びかけ、児童館で衣類を収集し、保護者が集まった服をサイズ毎に仕分け、会場も設営し、当日の参加者の対応なども携わった。地域の保護者と児童館が協力・連携した事業である。

「大切に使用して、次は持ってきます」「無料で頂けるのが本当に助かります。男の子なのでよく汚すのでありがたいです」「今まで頂いたお気持ちをバトンタッチしていきたいです」などの感想がある。衣類を無償でもらった家庭は、子どもの成長と共に、次は衣類の提供者となり、スタッフとなってきた。活動自体が地域で循環する、日野市の児童館が得意とする地域循環型の事業である。

日野市の環境マネジメントシステム「ひのエコ」の概念と一致し、特に市民と協力して行われた実績により、日野市長より『ひのエコクローズアップ表彰』を 2021 年 3 月に受賞した。現在は市内 7 館で同事業を年 2 回（6 月夏物、11 月冬物）開催しており好評を得ている。

10．フードパントリーとの連携

市内の全児童館で 2022 年 7 月（学校給食がなくなる夏休み前）からフードパントリー事務局（フードバンク TAMA）と連携し、子どもや子どものいる家庭を対象にフードパントリー事業を開始した。

フードパントリーは、経済的事情等により支援を必要とする個人・世帯に対し、直接食品等を提供しながら、生活上の困りごとがある方を適切な相談機関につなぐ活動である。フードパントリー事務局が実施しており、連携する日野市社会福祉協議会などの施設で食品を配布している。児童館はフードパントリーの対象を「子どもや子どものいる家庭」に限定し、事業の性質上、宣伝はせず口コミのみで展開した。

SDGs の目標では「No1 貧困をなくそう」「No3 すべての人に健康と福祉を」「No10 人や国の不平等をなくそう」「No11 住み続けられるまちづくりを」などに当たる事業となる。

空腹で来館する児童への対応はおそらく全国の児童館共通の課題ではないだろうか。土曜日や夏休みなど学校給食がない期間、お腹を空かせた子どもの様子を、従前は心配しながらただ見守るしかなかった。今はアレルギーの確認ができれば、食品を提供することができるようになった。この問題が一歩前進することができたのである。

ただ、課題もある。食物アレルギーの関係から小学生へ直接、食品を配ることができない。また、食品が必要と思われるケースでも、本人のプライドなどがあり、お腹が空いているとは言わない事が多い。仲間と一緒に児童館の手伝いを依頼して、お礼として食品を提供するなど工夫をしている。課題の多い事業ではあるが、子どもや家庭に食料を渡す仕組みができたことは大きな意味を持つと考えている。

11．SDGs 関係団体との連携

（1）ひのミラとの連携

2021 年 7 月。企画経営課の紹介で、持続可能な日野の未来を創る高校生チーム『ひのミラ』の中心となっている、市内の都立日野台高校の担当教諭とお話をする機会を得た。「ひのミラ」は、SDGs を軸に高校生の視点で必要な取り組みを考え、チャレンジする有志チームである。

自分の住む地域と社会課題を結びつけていく事に興味がある人であれば誰でも参加できる。都立日野台高校や都立日野高校の生徒など高校生はもちろん、大学生や近隣市の八王子にある中学校教諭、市内の大人も含め、SDGs に関心のある人が皆で活動をしている。児童館もミーティングに参加させてもらい、２つの活動で連携をすることとなった。

（2）「SDGs スタンプラリー with ひのミラ×イオンモール」

2021 年 9 月、イオンモール多摩平の森で開催した「SDGs スタンプラリー with ひのミラ×イオンモール」に、児童館の子どもたちが作成したポスターを展示した。児童館でも何か手伝いたい旨を伝えたところ、子どもの描いたポスターが欲しいと言ってくれたのだ。当日、高校、大学、地元企業が展示する中で、児童館の小学生 1 年生から 4 年生の数名が描いた SDGs ポスターが温かな雰囲気を出し、張り出されていた。

（3）SDGs 紙芝居による啓発活動の計画

ひのミラのミーティングに参加していた大学生から、子どもを対象に SDGs 啓発を行いたいと話があった。児童館・学童クラブで紙芝居を使い啓発を行うことを決めた。2021 年の 10 月頃から相談を始めて、2022 年 2 月に児童館行事の際に紙芝居を実演する予定となった。

ひのミラ紙芝居チーム（高校生、大学生、社会人で構成）が立ち上がり、オリジナル紙芝居を新たに作成し、2022 年 1 月に完成した。

残念ながら新型コロナウイルス感染症の感染が拡大し 2022 年 1 月中旬以降、児童館の行事を中止せざるを得ない状況となってしまい。予定していた 2 月の行事でのお披露目が延期となってしまった。

（4）ひのミラ SDGs 紙芝居の実演。

「ひのミラ」の紙芝居初上演は、2 月から遅れること 4 か月後、2022 年 5 月である。当初は、学童クラブで上演しようと考えていたが、コロナ禍で学童クラブへ部外者の立ち入りができなくってしまった。そこで、さかえまち児童館こどもまつりにおいて、SDGs 紙芝居コーナーを設けて上演することした。

事前打ち合わせでは、紙芝居コーナーの参加景品として、ペットボトルを再利用したミサンガや保冷剤を再利用した消臭剤などの提案が出た。ひのミラの紙芝居チーム（高校生 3 名、大学生 1 名、社会人 1 名）と児童館とが共同で景品を作成した。当日の紙芝居では、高校生の迫力のある読み方に、紙芝居がまるで演劇を見るかのような臨場感があり、子どもや乳幼児と保護者に大好評であった。紙芝居の構想から実施まで半年を要したが、無事に SDGs 啓発をひのミラと連携・実施できた。

さらに、同年 8 月には移動児童館として、夏休み中の学童クラブに出かけて、ひのミラの紙芝居を上演した。この時点でも感染予防の為、学童施設内は部外者の立ち入りは禁止となっていた。そこで学童施設の外、すぐ横にブルーシートを張り野外公演で実施した。

（5）ひのミラ紙芝居の DVD 配布

「SDGs を知れて、紙芝居を読んでいたことをまねして、エコをして地球みんなを大切にしたいです」など、ひのミラ紙芝居 DVD を見た学童クラブの児童から多くの感想をもらった。

「ひのミラ」紙芝居を録画したＤＶＤ作成をすることになった。紙芝居チームは高校 3 年生が中心で受験を控えていた為、これ以上の上演ができない事を受けて、企画経営課が紙芝居を録画したＤＶＤを作成してくれた。同年 10 月に市内全児童館にこのＤＶＤを配布した。

さらに児童館が管轄ブロックの学童クラブでも視聴することをお願いした。児童館 10 施設、学童クラブ 29 施設の計 39 か所で SDGs

の啓発が進んだことになる。令和４年度の学童クラブの在籍児童は約2,100名なので出席率70％約1,500名弱と10児童館で視聴した児童と合わせると約2,000名の子どもがSDGsの知見を増やしたことになる。

12.「手をつなごうこどもまつり」の実践

（1）「手をつなごうこどもまつり」でのひのミラ実演

「手をつなごうこどもまつり」は、日頃から地域で子ども達のために活動している市内の団体・行政機関が実行委員会として２０以上の団体が連携・協働し、毎年秋に開催している子どものためのまつりである。令和４年11月６日（日）に開催され約5,000名の参加者があった。

ひのミラは同まつりのステージにも児童館の誘いで参加することになった。ステージで10分ほどの紙芝居実演だったが、乳幼児から大人まで観客を魅了し、SDGsの啓発を行うことができた。

（2）全体企画で行ったSDGs

さらに同まつりの全体企画として「みんなのSDGs」をすることになった。まつり実施の約２ヶ月前から「今、自分が取り組んでいるSDGs」などを子どもに書いてもらい、まつりの当日、会場にパネルを出し子どもたちの考えたSDGsを張り出すという企画である。市内全児童館を中心に実施し回収した。事前に集めた物と、当日書いてもらった物を合わせると約1,000枚となった。まつりに来場した子ども、保護者、参加団体、さらに来賓として訪れた日野市長、副市長、教育長も、子どもたちが考えたSDGsに関心を持って見てくれた。同時に、児童館がSDGsを推進してきた成果が多くの人に伝わる機会となった。

13. SDGsの展開から見えてきたこと

（1）SDGsの浸透

「SDGsだからいいんだよ！」令和４年10月29日に実施したハロウィンラリーで子どもが発した言葉だ。仮装して街を巡る行事中に小学２年生の女子が「このグッズ青色が欲しいけど、女の子で持っている子はみんなピンクか赤なんだよね」と言うと、別の子がすかさず「いいんだよSDGsだから（男女に関わらず好きな色を選んで良い）」と返したのだ。SDGs『No５ジェンダーの平等を実現しよう』が子どもに浸透していると感じた瞬間だ。SDGsの目標を子ども達がいち早く体現してくれたのである。

大人が子ども達の未来・環境を守り、より過ごしやすい社会にすべきと考えていた。しかし、子どもたちの方が先に反応して実践してくれるという嬉しい誤算であった。

2019年にSDGsを児童館の５カ年計画に載せると職員に話した時には、「SDなんですか」と言われた。SDGsの意味は勿論、言葉自体も知らない職員が多かった。しかし2022年の「手をつなごうこどもまつり」では全体企画で、子どもたちのSDGsをテーマにしようと職員が提案し、決めるまでに至った。SDGsが浸透していると言える。

（2）児童館事業の目標展開の考え方

SDGsの啓発と実践を進めて改めて分かったことの１つは、たとえ目的が遠く離れて、進む方向も合っていないと思われても、粘り強く継続する事により、ゆっくりと方向が合い、タイミングが合うと一気に目標までの距離が近づく、そして実現するということだ。また、実践においては、社会的な意義があるか考慮し目標を定め、計画、実践、結果の検証、実績の記録（見える化）の手順を踏むことも重要である。

（3）おわりに

SDGsは児童館だけでなく、子どもに関わるすべての職場で、同様の展開ができないかと考えている。地球温暖化をはじめ、様々な問題の解決は、遠く果てしない道のりに思えるが、今を生きる大人として何かやらなければならないと感じている。今後もSDGsを通じて、様々な垣根を越えて、子どもたちのより良き未来をつくるために多くの人々と協力・連携して進めていきたい。